

# 貴族作家 A.K.トルストイと 1840 年代ロシア —『アルテミイ・セミョーノヴィチ・ ベルヴェンコフスキイ』をめぐって—

金 沢 友 緒

## はじめに：1840 年代ロシアの作家達

19 世紀中葉のロシアの文壇では、いわゆる「雑階級」出身の作家が増加の傾向にあり、中心的役割は彼等へと移っていく。ロマン主義時代を担ってきた貴族作家は相対的に減少し、И.И.パナーエフ<sup>1</sup> が『回想』の中で述べているように、文学活動の表舞台から撤退する傾向にあった。一般的なロシア文学史の理解においても、1840 年代はそうした流れの中に位置付けられている。<sup>2</sup>

しかし実際のところ、1840 年代に発表された作品には数多くの貴族作家達の仕事が含まれており、彼等の活動もまた読書界に一定の比率を占めていたことがわかる。したがって当時のロシアの文学的動向を明らかにするためには、彼等の仕事について明らかにする必要があろう。本稿ではその第一歩として、貴族の出自を持つ A.K.トルストイ Алексей Константинович Толстой (1817-1875) の作品を取りあげたい。トルストイはプーシキンやレールモントフ等、1830 年代に既に文壇で活躍していた貴族作家に継ぐ、新たな世代として位置づけることができる。この 2 人の作家が文壇を去ったのと交代して、彼はデビューを果たしたのである。

トルストイは数多くの叙情詩を手がけ、後年は歴史小説や戯曲も発表した。が、1840 年代、すなわち初期の作品については、ロシア語での処女作『吸血鬼』(1841)を除くと、他は習作程度のものと見なされてきた。しかしこの時期の創作は、トルストイ個人の文学的發展をみるためだけでなく、「自然派」や生理学ものが流行したこの時期の文壇における貴族作家の動向を明らかにする上でも極めて重要である。

したがってここでは、トルストイの初期作品であり、これまで「自然派」のカテゴリーに

<sup>1</sup> 《テレスコープ誌》の出版者ナデージデンがパナーエフに伝えた 1838 年当時のエピソードである。ナデージデンはある時集まりであつたお偉方から、「近頃、莊重な詩が書かれていないのは何故か」と尋ねられて、「最近は詩の大半は貴族でない者達が手がけているからです」と答えている。Панаев И.И. Литературные воспоминания. М., 1950. С. 124.

<sup>2</sup> なお、ここでの「貴族作家」とは、「貴族に出自を持ち、伝統的な貴族文化の洗礼を受けて育った作家」のことであり、特定の文学スタイルを目指す人々のことではない。

入れられてきた『アルテミイ・セミョーノヴィチ・ベルヴェンコフスキイ Артемий Семенович Бервенковский』（1845）を考察の中心に据え、その手法の実体を詳細に分析することによって、当時の貴族作家の文学的趣向を明らかにしたい。なお、『アルテミイ』の分析に際しては1964年出版の作品集（全4巻）を用いている。<sup>3</sup>

## 1. A.K.トルストイ：ロマン派を継ぐ1840年代の貴族作家

『アルテミイ』自体の考察に入る前に、その背景としてのA.K.トルストイの初期の創作活動と伝記的情報について概観しておこう。A.K.トルストイ（1817-1875）は由緒ある貴族の家庭に生を受け、エリートとして生涯を送った。<sup>4</sup> 彼は母アンナ（息子アレクセイが生まれてまもなく夫と離婚）とその実兄にあたる伯父A.A.ペロフスキイ（筆名A.ポゴレリスキイ 1787-1836）に育てられたが、この2人がいずれも作家であったことは幼少期からの文学体験に大きな影響を与えることになった。ロマン主義作家の伯父は甥に対して熱心に文学教育を施し、イタリアやドイツ、フランス周遊の際には同道して、文豪達との会合にも甥を伴っている。外国周遊の中でトルストイの語学力は一段と鍛えられ、ドイツ語、フランス語、英語に加えて、イタリア語にまで精通するようになった。勿論外国語の習得は当時の貴族には珍しくなかったが、ここで注目したいのは、こうした環境が彼の早期からの作家意識と深く結びついていた点である。

若い頃から伯父と同じ文化環境で生活し、伯父の体験を共有していたことはトルストイに大きな影響を与えた。特に、19世紀初頭のロマン派最盛期の世代の世界観に共感的であったこと、文学だけでなく、美術、音楽等の芸術や諸学問の領域に通じていたことは早期から彼の文学を方向づけるものとなったのである。<sup>5</sup>

1836年に伯父が亡くなり、翌年トルストイはロシア政府使節団としてフランクフルト・アム・マインに派遣され、そこで職務に就いた。しかし彼は職に就いてまもなく退職願を提出しており、若い頃から創作に専念する決意を固めていたことがわかる。<sup>6</sup> 彼は将来の妻となるソフィヤ・アンドレーエヴナへの書簡の中で、役所勤めが自分の創作の妨げにな

<sup>3</sup> Толстой А.К. Соб. соч. в 4 томах. Т. 3. М., 1964. С. 130-139. 以下、同書からの『アルテミイ』の引用は本文中に頁数のみを示す。

<sup>4</sup> A.K.トルストイの伝記的情報、評価に関しては、特に下記の研究を中心に参照した。Золотарева С.А. Очерки по Истории Русской литературы. СПб., 1912; Жуков Д.А. А.К. Толстой. М., 1982; Трушкин М.Д. А.К. Толстой и мир русской дворянской усадьбы. М., 2009.

<sup>5</sup> 少年時代にトルストイは、К.П.ブリュロフ（1799-1852）に肖像画を描いて貰っており、この著名な画家との交流も貴重な経験となった。

<sup>6</sup> 正式に退職許可が出たのは1861年であり、これはA.K.トルストイはアレクサンドル2世の幼児期からの知己であり、彼が皇帝に引き留められていたためであったようだ。Жуков. А.К. Толстой. С. 278-279.

っていることをしばしば嘆いている。<sup>7</sup> A.K.トルストイは 1841 年に初めてロシア語でのデビュー作、幻想小説『吸血鬼』を発表し、ベリンスキイから表向きは好意的に迎えられている。しかしその後幾つか小説を手がけるも、彼の 40 年代の活動は高い評価を受けなかった。1856 年『私のツリガネソウ』で抒情詩人として再デビューを果たして注目されると、以来彼は「小説家」としてよりむしろ「抒情詩人」として理解されるようになった。トルストイの伝記的研究で知られる Д.А.ジュコフは「A.K.トルストイは、詩作の時に比べると、小説の中では詩人になれない」と指摘している。<sup>8</sup> このようにトルストイの文学に「詩人」を期待し、彼の文学の本質を詩的叙情性に置くのは、従来の傾向であろう。

彼の作家としての資質は別として、創作最初期の 1840 年代に発表としたものとしては、小説の方が目立っていた。彼は詩ではなく、むしろ当時流行しつつあった散文のジャンルに関心を抱いていたのである。初期の A.K.トルストイが小説の創作を目指していたことが窺え、この点を看過することはできないだろう。

本稿は彼の作家としての資質ではなく、彼の 1840 年代の文学的関心を問うものである。この狙いに即して習作期の作品『アルテミイ』（1845）を取りあげたい。『アルテミイ』は彼の数少ない散文小説の 1 つであり、彼がこの時期「小説」のジャンルで何を実現しようとしていたかを理解する手掛かりとなるだろう。

## 2. A.K.トルストイの初期作品『アルテミイ』とその評価

A.K.トルストイの『アルテミイ・セミョーノヴィチ・ベルヴェンコフスキイ』は、B.A.ソログーブ伯爵編纂の文集《昨日と今日》（第 1 部、1845 年）に掲載された。この文集全体については、同時代の K.C.アクサーコフが、B.Φ.オドエフスキイの作品を除くと、「他の散文作品は特筆することもない」と指摘しており、<sup>9</sup> 総合的な評価は高くなかった。文集は詩、小説、論文のジャンルから構成されており、書き手の約半数は貴族作家であった。具体的には、オドエフスキイ公爵の『孤児』、ソログーブ伯爵の『小犬』、トゥルゲーネフ、E.Π.ロストプチナの詩等が挙げられる。

『アルテミイ』はデカブリストの乱前後の時代を舞台とする物語で、小説のジャンルに含まれた。同時代から今日に至るまで短篇小説『アルテミイ』についての分析はほとんどなされていないが、A.K.トルストイの研究では、『アルテミイ』は「自然派」に属する作品と見なされてきた。前述の作品集の解説で、И.Г.ヤンポリスキイは「トルストイが「自然派」に捧げた貢ぎ物である。主人公の像の中にははっきりとゴーゴリの影響、特に『死せ

<sup>7</sup> Толстой. Соб. соч. Т. 3. С. 52-53.

<sup>8</sup> Жуков. А.К. Толстой. С. 120.

<sup>9</sup> Аксаков К.С., Аксаков И.С. Литературная критика. М., 1981. С. 167-174.

る魂』の影響が伺われる」<sup>10</sup>と述べている。

ジュコフもまた以下のように指摘している。

《昨日と今日》という、B.A.ソログープ伯爵編纂の文集の中に散文を載せることになった。物語『アルテミイ』（旅の途中で、永久運動するエンジンや、へんてこな装置を作り出す機械技術に魅せられた地主貴族と出会う物語）は明らかにゴーゴリの模倣であり、「自然派」の精神で書かれた彼の唯一の試みである。<sup>11</sup>

確かに 40 年代当時に推奨された「自然派」の手法、すなわち〈ロシア社会を細部にわたって描写するスタイル〉や、ゴーゴリ『死せる魂』の場面や登場人物を想起させるようなものを、この『アルテミイ』の中にもまた読み取ることができるだろう。

しかし、にも拘わらずゴーゴリに倣ったはずのこの作品について、批評家ベリンスキイは好意的ではなかった。彼のコメントを引いておこう。

A.K.トルストイ氏の『アルテミイ・セミョーノヴィチ・ベルヴェンコフスキイ』は—いや、この作品については語るまい。…この作品を不快に思う者にとっては、口に出すのはばかられる。<sup>12</sup>

これは《昨日と今日》掲載の作品を個別に取りあげる中での『アルテミイ』評であるが、ベリンスキイはこの文集批評の結びにおいても、再度『アルテミイ』を批判している。このように「自然派」を推奨していたベリンスキイが『アルテミイ』に対して批判的であった点を考慮すると、『アルテミイ』を「自然派」に分類したジュコフの理解が、厳密な分析によるものではなく、印象批評に留まるものであったと推察される。

すなわち後年定着した『アルテミイ』解釈は、1840 年当時の複雑な文学動向を正しく把握したうえでなされたものではないと言えるだろう。

本稿ではソビエト期の研究が提示してきた「自然派」観にとらわれることなく、より自由な視点から『アルテミイ』を考察し、作家の狙いがどこにあったかを具体的に見ていきたい。

### 3. 『アルテミイ』における異世界の風景：旅の宿、アルテミイの生活習

<sup>10</sup> Ямпольский И.Г. Примечание // Толстой. Соб. соч. Т. 3. С. 566.

<sup>11</sup> Жуков. А.К. Толстой. С. 89.

<sup>12</sup> Белинский В.Г. Соб. соч. в 9 томах. Т. 7. М., 1981. С. 549.

## 慣，発明品

物語の舞台は「今」（作品発表時 1845 年）から 20 年前の、ロシア・ロマン派の全盛期である。画家の「私」は、回想形式で当時の奇妙な体験を語っている。ある時旅の途中で馬車が壊れ、修理をするために不思議な地主屋敷に立ち寄った。屋敷の主人アルテミイは、中年の善良な男であるが、若干変人で、自称「発明家」であった。数日間滞在している間に、「私」は彼の奇妙な発明品（例えば「三角帽の形をした洗面台」「ピストルのようなインク瓶」）や奇妙な生活習慣（例えば「夕方 5 時半から 6 時まではカツラと長靴と金時計を身につけて裸で歩き回る」「6 時から 6 時半までは叫び回る」等）に振り回される。やがて馬車も直り、「私」は主人に見送られて屋敷を後にした。

「旅の途中でおかしな地主に出会う」という設定は、ジュコフの言に代表されるように、『死せる魂』との類似を指摘されてきた。しかし、筆者はこの見解に対して 2 つの点で異を唱えたい。まず馬車の旅行の主題は、ゴーゴリの他にカラムジンやラジーシチェフも手がけており、「馬車が壊れてその土地の屋敷に立ち寄る」という設定は、ゴーゴリの『死せる魂』以上に、むしろカラムジンの『ロシア人旅行者の手紙』の冒頭に近い部分を想起させる。したがって『死せる魂』とのつながりだけを強調するのは無理があるだろう。

次に、そもそも「旅の物語」という枠組は長い文学的な伝統を持っており、19 世紀に考案されたものではない。近いところでも我々は 18 世紀ロシアの B.A.リョーフシンや M.M.シチュエルバートフの旅行記を挙げることができ、それらはむしろ異世界への旅を演出したものであった。A.K.トルストイの『アルテミイ』もまた、ロシアではない異世界を持ち込む方法として、旅の形式を用いた可能性もある。現に彼はまたロシア語で 1841 年に幻想小説『吸血鬼』<sup>13</sup> を書いており、彼の異世界志向は創作初期の段階で既に明確化している。『吸血鬼』の中では主人公ルネフスキイは「一夜の宿を請う旅人が、宿泊先の屋敷で不思議な体験をする」というエピソードを持ち出している。こうしたトルストイのスタイルを踏まえると、『アルテミイ』における旅の設定は、過去の文学に見られた「異世界体験」の方法としての旅文学にルーツを求めることが出来るかもしれない。

ではアルテミイの生活習慣はどうなっているのだろうか。「私」は執事から彼の奇妙な習慣について聞かされる。

「今 5 時 15 分です。アルテミイ・セミョーノヴィチは 6 時まで散歩して、6 時から 6 時半までは叫ぶんです、そしてそのあと」と執事は重いため息をついて付け加えた。「あの方は機械学に専念されます。」

<sup>13</sup> Толстой. Собр. соч. Т. 3. С. 7-68.

「なんだった？」私は好奇心に煽られて聞いた。「アルテミイ・セミョーノヴィチは毎日 6 時から 6 時半まで 30 分間叫ぶのかい？」

「いつもというわけではございません、旦那様。時には 1 時間叫んでもあります、しかし湿っぽい天気のときだけでございます。」[134]

その後、旅人の「私」は、アルテミイが善良な微笑みを浮かべて身体をひまわりで隠し、「鬘」と「長靴」と「金時計」だけを身につけて中庭を歩き回る姿を目にする。

この生活習慣について、アルテミイ自身が「健康ですよ！ 君、健康のために歩き回るので」と説明し、自分が科学に心酔していることを公言している。

当時の「自然派」の作品ならば、「農奴の数」、「家畜の多さ」や「領地の広さ」、「穀物の生産量」へ言及し、一家の長として振る舞う主人の姿を描写するのが常套であるが、『アルテミイ』にはそうした叙述が見られないのである。

また、屋敷の主はひたすら「私」に自分の発明品を自慢するが、これも当時の文学に馴染みの地主像とは異なったものであった。

「私の寝室へ参りましょう。ねえ、あなた、これは何だと思えますか？」

「三角帽ですか？」

「全然違いますよ。洗面台です！ で、これは？」

「ヴァイオリンでしょう。」

「そんなもんじゃありません！ これは剃刀付きの旅行用キャビネットです。ではこれは？」

「ピストルです。」

「ピストルとはいいいすな！ これはインク壺、インク壺です。お若い旅の方、インク壺ですよ。」

アルテミイ・セミョーノヴィチは、他にも沢山のもの、ヴァイオリンや洗面台の類のものを私に見せた。[134]

アルテミイは山ほどある発明品（「奇妙な形のもの」「永久運動する道具」や「音楽を奏でる生活用品」）を日々私に紹介するのだが、それらは次々に登場しては舞台の前面から消え去ってしまい、物語の中で特別な役割を果たしているようには見えない。では何故これらの描写が持ち込まれたのだろうか。少し具体的に見てみよう。

例えば「永久運動機関」は 1830-40 年代に流行した話題であり、多くの人に広く知られていたが、<sup>14</sup>『アルテミイ』ではこの概念が音楽の分野にも応用されている点が注目される。

---

<sup>14</sup> Толстой. Собр. соч. Т. 3. С. 566.

「科学」と「音楽」の双方を連想させる用語として持ち込まれているのだが、これは音楽への愛と造詣が深かった貴族トルストイならではの発想である。また、身体を隠すのに使われた「ひまわり」も同様である。1847 年の《読書文庫》の記事によれば、「ひまわり」は「風と十分な水を必要とする」もので、栽培条件が厳しいため、「完璧な農夫のいる西欧においてさえ、生産量は少ない」<sup>15</sup> とある。すなわち栽培困難なひまわりをあえて育成するという行為を通して、作家はアルテミイの自然科学への関心を描こうとしたのだった。「ひまわり」ははたただの植物ではなく、彼が知恵と工夫を凝らして生み出した「科学への愛」の結晶なのである。この地主は作物を収穫することではなく、科学的な挑戦に関心があったのだ。

科学へのこの偏愛はアルテミイと周囲の人間との関係にも持ち込まれている。彼が客の「私」に屋敷の台所を披露している場面である。

3 人の人間が大変な苦勞をして巨大なローラーを回し、鉄の棒を動かしていたが、それは火の前で鶏肉を回しているのだった。

「どうです？」と手揉みしながら家の主人は言った。

「思うに」私は答えた。「メカニズムが少し複雑じゃないですかね。この可哀想なコック見習いの少年達にとっては少し重すぎるんじゃないでしょうか。」

「とんでもない！ 重い方が良いんです。運動ですよ、あなた、運動です！ おお！ …」[134]

ここで描写されるのは、「主人による農奴の搾取」の場面でも「牧歌的な田舎生活」の場面でもなく、「自分の奇妙な発明と健康の美学」に取り憑かれた男の奇行であった。

執事の次のような説明もまた、アルテミイの背景にロシア的風景とは異質の要素があることも感じさせる。

「…故セミョン・アルテミエヴィチー彼に天のお恵みあれ！—は、かなりの領地を我々にお残しくださいました。700 人の農奴と、旦那様、30 万の資本がロンバルディアにあります、おそらく、それで十分でしょう！ ただもう機械技術の呪いが我々を破産させるのです。私にはわかります、我々を破産させるだろうってことが！」[135]

アルテミイの背後にイタリアはロンバルディアという異国を感じさせる記述である。彼にイタリアの血を引く祖先がいることを示唆しているのであろうか。

このように地主貴族アルテミイの「科学への偏愛」に支配された生活風景が、A.K.トルス

<sup>15</sup> Промышленность и сельское хозяйство // Библиотека для чтения. Т. 84. 1847. С. 11-12.

トイの貴族的関心や教養によって実現していることがわかるだろう。

ようやく馬車が直って出発する「私」であるが、その馬車にはアルテミイが奇抜なアイデアで改造を加えていた。すなわち馬車の片側には「コーヒーミル」が、反対側には「歌うオルガン」が据えられていて、馬車が「動く」ことによってそれらが作動する仕組みになっている。とはいえこれらはまもなく壊れて「私」はまた立ち往生する羽目になるのであった。

このように「馬車が壊れて旅人が通りがかりの村に立ち寄る」という馴染みの設定で始まった物語だったが、「沢山の科学の産物を積み込んで出発する」という予想外の結末になっており、これが単なる「自然派」のスタイルで書かれた作品ではないこともまた明らかであろう。

#### 4. 観念の物語としての『アルテミイ』：アルテミイと「私」、科学と芸術

『アルテミイ』は、ロシア社会を写生した作品ではなく、「科学信奉」というモチーフを肉化しようとする試みであった。それは客人の「私」の役割を考えることにより、一層明確になる。『アルテミイ』の「私」は画家であるが、職業的性格や生活習慣が描かれているわけではない。つまり「画家」としての特性は物語の中では十分に発揮されていないのである。

ではトルストイが語り手である「私」に画家という職業を与えたのは、どのような狙いからだったのだろうか。

この問題、すなわち作家の意図は物語をアルテミイと「私」の関係の中で捉えることにより、明らかになるだろう。アルテミイが「私」に対して親近感を抱いており、この親近感は、善良で客好きの領主の性格の表れとしてではなく、「私」への特別な信頼として描かれている。すなわち「私」が客であることが理由ではなかった。

深夜、「私」は目を覚まして、執事トレペチンスキイが自分の枕元にいることに気づいた。執事がこっそりとやってきて、主人が奇行を止めるよう説得してくれ、と懇願する場面である。

「どうか旅のお方！ ご親切いただけるならば。アルテミイ・セミョーノヴィチを説得してください。ご自分の機械学をやめるように、と。アルテミイ・セミョーノヴィチは、あなた様のことをお気に入りです、私には全部わかります。ひょっとしたらあの方はあなた様の言葉になら耳を貸すでしょう。そしてもし聞いてくださったなら、私は一生恩に着ます。そしてあの世であなた様に神様のお恵みがあるでしょう！」[135]

周囲の目から見ても、アルテミイが「私」に特別な関心と信頼を寄せていることが明らかなのである。この関心は「ラビリンスの場面」でも再び強調される。「私」は馬車の修理



を催促するが、アルテミイは修理がまだ済んでいないことを理由に「私」を引き留めようとする。そして「私」が物語のエンディングで、彼の所業に怒りを爆発させ、連れ込まれたラビリンスを強引に脱出した時に、アルテミイが示した失望は大きかった。

断固たる私の行動を目の当たりにして、アルテミイ・セミョーノヴィチは大層混乱し、善良な顔に深い失望の色を浮かべた。

「まあなんてことだ、旅の方。」と彼は言った。「私はあなたからこんな仕打ちを期待していませんでした！ …（中略）」

…（中略）…「私は決して決してこんな事を予想していなかった、しかも誰から？ あなたからです、私が兄弟のように愛したあなたからなんです。」[138]

アルテミイの感情は、親近感を越えてもはや執着に近い。これは一体何に起因するものなのだろうか。ここにその理由を示唆している場面を引いておこう。アルテミイが日課を終えた後で会話する場面である。

「…propos!（ところで：金沢）あなたは作家ですか？」

「いいえ、私は画家です。」

「画家ですって！」とアルテミイ・セミョーノヴィチは嬉しそうに叫んだ。

「私と一緒に来てください。」

彼は私の腕をつかんで、屋敷の別の一角へと引っ張っていった。そこは美しいイタリアとフラマン派の絵で埋め尽くされていた。アルテミイ・セミョーノヴィチは絵について話し始め、私は彼の見識と深い教養に心をうごかされた。彼は真の愛好者の情熱をこめて語った。しかし、最後に彼が発した言葉は私を驚かせた。

「これらはみな、しかし」と彼は言った。「機械学と比べるとくだらないものです。」[133]

ここで描かれているのは、アルテミイの絵画（芸術）への愛情であり、同時に機械学がそれを超えるという信念である。彼は機械学を最も評価しているが、その一方で絵についての豊かな見識と深い関心を持ち、屋敷の半分には見事な画廊さえあったのだ。科学に目覚めた今でもなお、彼が芸術というジャンルに特別に関心を寄せていることは、その発明品においても現れている。彼の発明品の中には、時折「オルガンとコーヒーミルを兼ね備えた馬車」や「フルートを奏でる長靴」といったような、実用と音楽を兼備するものがあった。アルテミイが「科学」を第一としながらも、「芸術」との融合を目指している姿が示され

ている。<sup>16</sup> 彼が「私」に執着するのは、「私」が芸術の領域を表象する存在（画家）だったことによる。

アルテミイと「私」の関係は、「主人」と「客人」あるいは生身の人間同士の関係ではなく、「科学」と「芸術」の関係を肉化したものであった。アルテミイと「私」、「科学」と「芸術」の関係は、物語の結末すなわち「ラビリンスの場面」へと向かって一段と緊張感を高めていく。この場面では「科学」と「芸術」の対立が比喩的に表現されている。

馬車の修理が終わって旅立つ直前に、アルテミイは「私」を中庭に作った「巨大なラビリンス（лабиринт）」へと誘う。ラビリンスは入るのは簡単だが、容易には出られない仕組みになっていた。「それでは今度は出てきてください」と謎解きを挑むアルテミイに対して、ついに「私」は堪忍袋の緒を切らした。その場面を引用しよう。

「冗談は沢山です。アルテミイ・セミョーノヴィチ。私は本当に急いでいるんです。どうかお願いしますから、私に出方（ラビリンスからの出口：金沢）を教えてください。」

「出方をですって！ いや、旅の方、晩までそこに居らっしゃい。そして明日になって、コーヒーを飲んだ後でお発ちになってください。私は今コーヒーミル（アルテミイの発明品の1つ：金沢）を持ってきます。あなたにはこれを見てもらわなくちゃなりません。」

「あなたのコーヒーミルなんて見たくありません！」と私は我を忘れて言った。

「ほらもう一週間になります。あなたが私をここへお引き留めになっていることはご存知でしょう！ 教えてください、どうやってここから出ればいいのか、でなきゃ私が自分で出口を見つけますよ！」

「ああ、それでは！ それではどうぞ！」

そこで私は、考え抜かれたラビリンスへ一切敬意を払わずに、芝生を跨ぎ道を横切り、やがて気づけば元の場所、アルテミイ・セミョーノヴィチの傍らにいた。

断固たる私の行動を目の当たりにして、アルテミイ・セミョーノヴィチは大層混乱し、善良な顔に強い失望の色を浮かべた。[138]

アルテミイに対して客人の「私」は敬意を払わず反抗したが、それは「科学」に対して「芸術」が敬意を払わず反抗したことを意味するものでもあった。当時、「ラビリンス」という言葉は特定の心的傾向を示す比喩表現としてしばしば用いられていた。<sup>17</sup> ここで A.K.ト

<sup>16</sup> なお先に述べた「永久運動機関 вечный двигатель」という言葉の両義性ととも、アルテミイのこうした趣向と立場がこの作品の狙いを示唆している。「永久運動機関」の情報については以下を参照した。Блюм А.В. Книга и книжки в русской прозе // Сборник. Очарованные Книгой. Русские писатели о книгах, чтении, библиофилах. М., 1982. С. 10.

<sup>17</sup> 例えばベリンスキイは、レールモントフ『現代の英雄』批評の中で、ペチョーリンの心的状況を

ルストイは知識人にとって馴染みの「ラビリンス」の概念を、アルテミイが考案した「実物の迷路」によって形象化したのである。

ところでこのような手法はこの作品の中で他にも見られ、ここではさらに2つの例を引いておきたい。

1つはアルテミイと「私」の哲学問答についての描写である。

「まあなんてことだ、旅の方。」と彼は言った。私はあなたからこんな仕打ちを期待していませんでした！　こんなふうにして私のラビリンスから出たのは貴方が最初だと言っても良いでしょう！　…思えば、私は長い間これを作るのに頭を悩ませてきたんです。ゴルディアスの結び目のように、道を入りくませてね。あなたは明日までこれ（ラビリンス：金沢）を抜けられなかったでしょうに。」

「アレクサンドロス大王は、結び目を切ってしまいましたよ。」私は答えて、屋敷に向かって歩いていった。[138]（下線は筆者による。以後の引用箇所においても同様）

「ゴルディアスの結び目」<sup>18</sup>とは、アレクサンドロス3世にまつわる伝説に由来するもので、それを「切る」とは、「手に負えない問題を、誰も思いつかなかった大胆な一撃で解決する」という意味を持つ。アルテミイの迷路を脱出した「私」の行動をめぐって、主人と客は2人で「ゴルディアスの結び目」のメタファーで問答を展開している。

「科学」と「芸術」の緊張した関係を比喩的に表現した場面をもう1つ挙げておきたい。

アルテミイは「私」がラビリンスを乱暴なやり方で脱出した際に、次のように漏らしている。

「私は決して決してこんな事をされるとは予想しなかった(не ожидал)、しかも誰から？　あなたからです、私が兄弟のように愛したあなたからです。」[138]

「アルテミイ=科学」に対するこの「私=芸術」の反逆が、「予想しなかった（не ожидал）」こととして強調されているのだった。

この「予想外」は「科学」から「芸術」に対しての働きかけの中にも生じている。執事が夜訪

---

「暗いラビリンス (тёмный лабиринт)」と表現している。*Белинский В.Г. Взгляд на русскую литературу // Соб. соч. в 9 томах. Т. 3. М., 1978. С. 127.* なお、М.И.ミヘリソンの辞典 (*Михельсон М.И. Русская мысль и речь. Свое и чужое. Опыт русской фразеологии. Сборник образных слов и иносказаний. В 2 томах. СПб., 1903*) の中では、「лабиринт」の同様の用法としてサルティコフ=シチェドリ、А.ポゴレリスキイ等の文が挙げられている。

<sup>18</sup> *Толстой. Соб. соч. Т. 3. С. 566.*

れて、アルテミイを「科学」から遠ざけるよう説得してくれと懇願した時に、「私」がそれを承諾する場面である。

私は可哀想な老人に、彼の願いを聞いてやることを約束した。彼は私に感謝の言葉を浴びせながら出て行った。しかししばらくして彼は再び戻ってきた。

「もし」と彼はすすり泣きしながら言った。「あなたがアルテミイ・セミョーノヴィチを、機械からすっかり足を洗うよう説得することができなかったら、それはもうしょうがありません。少なくともあなたはサプライズ(сюрприз)を1つ受け取るでしょう。小さな物かどうかはわかりません。あの方は最近フルート付きの長靴を開発しました。ご想像のとおり、歌い出すのです。これは、少なくともサプライズ(сюрприз)ですよ。」[135]

「サプライズ сюрприз」は、例えばダーリの辞書では«нежданный подарок», オジェゴフの辞典では«подарок, которого не ждали»と示されており、いずれにしても上述の場面では「予期せぬ贈り物」の意味を表している。<sup>19</sup>「ラビリンス破壊の場面」での「予想しなかった」という驚きと、「サプライズ」の意味の呼応が、物語のエンディングの布石となっている。

「私」は「サプライズ」の正体をまだ知らない。「私」がこの正体を知ることになるのは、屋敷からの出発の時であった。馬車が直って喜ぶ「私」だったが、その他ならぬ馬車が、執事が予め仄めかしていたアルテミイの「サプライズ」だったのである。「これはあなたへのサプライズです」とアルテミイはにこやかに私を送り出す。望みもしなかったのに、馬車は今や「コーヒーミル」と「歌うオルガン」を備えた改造馬車になっている。

以上のように物語の結末では、「迷路破り」による「サプライズ」と「改造馬車」による「サプライズ」が呼応する形で配置され、「科学」と「芸術」の応酬が描かれている。

こうして『アルテミイ』に随所に盛り込まれた絵画、音楽から物理学、農業に至る多様な学問、芸術の情報は「自然派」的な描写を構成する役割を果たしていなかった。すなわちこれらの情報は「実際のロシア社会」を映し出したというよりは、作者の知的構想に基づいて、「芸術」と「科学」の物語を具体化するために使われたのであった。

『アルテミイ』の主題である「科学」と「芸術」の関係は、19世紀初頭のロマン主義時代、貴族作家達によって度々取りあげられてきた。『アルテミイ』の中では、この主題は、ロマン主義最盛期の理想と信念ではなく、むしろ批評と相対化の精神によって展開させられている。ここには家 A.K.トルストイの、いわゆる「ディレッタンティズム」が認められるだろう。

<sup>19</sup> Даль В. Толковый словарь живого великорусского языка Владимира Даля. Т. 4. СПб. -М., 1912. С. 702; Ожегов С.И. Словарь русского языка. М., 1970. С. 774.

## まとめ：『アルテミイ』を通してみる 1840 年代貴族作家のディレッタンティズム

既に述べたように、1840 年代ロシアの文学思潮の中心となっていたのは、ロシア社会の描写を課題として掲げていた作品であり、その担い手は多様な階層の作家であった。

しかし 40 年代後半には描写の主な対象が農奴や下級役人に移り、「自然派」というターム<sup>20</sup>によって目指すべき文学スタイルが一部の批評家によって示されるようになっていった。しかし実際には 1840 年代には多様な傾向が混在していたのであり、この「自然派」形成期にも、貴族作家達は依然として自身の知識と教養と趣味を生かした作品作りに打ち込んでいたのである。本稿で取り上げた初期トルストイと『アルテミイ』はその代表的な例だが、こうした貴族作家の動向を確認するために、B.Φ.オドエフスキイの作品について言及しておこう。

オドエフスキイは 1830 年代後半から「芸術」「哲学」「科学」等の様々な学問的テーマを用いた短編を発表しており、1844 年にこれら短編に序論を加えて『ロシアの夜』<sup>21</sup>を出版した。この作品は形而上学的な議論を真正面から展開した仕事で、そこには彼の博学が全面に打ち出されていた。A.K.トルストイの伯父ポゴレリスキイ等とも親交のあったオドエフスキイは、その幅広いジャンルへの好奇心と教養ゆえに同時代の文壇仲間から「貴族性」と、「ディレッタンティズム」を認められていた。

パナーエフは『文学的回想』の中で、芸術や科学、料理等多様な分野の学問に手を出すオドエフスキイを「ディレッタント」と呼んでいる。<sup>22</sup> パナーエフによるこの描写は、まさに A.K.トルストイによるアルテミイの描写に類似している。博学を披露しながら自身のサロンで客をもてなすオドエフスキイは、彼を外側から観察するパナーエフの目には、やや滑稽な存在に映ったようである。

科学愛好者アルテミイもまた、一種の「ディレッタンティント」として描かれているのである。トルストイは、『アルテミイ』の中で自身の知を結集し、共感をこめながら、しかし客観的な立場でこの「ディレッタント」を描いている。

トルストイは『アルテミイ』の中で、生理学的描写を目的としたのではなく、知のあり方に対する自分の立場を示したのである。今回は A.K.トルストイを取り挙げるに留まった

<sup>20</sup> 以下の文献を参照した。Громова Л.П. (ред.) История русской журналистики XVIII-XIX веков. СПб., 2003. С. 320.

<sup>21</sup> オドエフスキイの『ロシアの夜』については以下の文献を参照した。Одоевский В.Ф. Русские ночи. М., 1975.

<sup>22</sup> オドエフスキイの作家像を考察する際に、下記に収録された同時代人の回想録を参照した。Одоевский в жизни. Автобиография. Отзывы и воспоминания современников // Одоевский В.Ф. Последний квартет Бетховена. М., 1982. С. 320-376.

が、こうした狙いと傾向は同時代の他の貴族作家にも認められるのではないだろうか。

無論 1840 年代の「知」をめぐるロシア社会の関心はあらゆる階層の中で高まっており、例えば《読書文庫》はより幅広い読者層を念頭に置いていた。ゲルツェンの著作『学問におけるディレッタンティズム』<sup>23</sup> の登場もまたこうした傾向を示すひとつの例であろう。

このような時代の動向の中で、ロマン主義以来の「知」の特権階級であった貴族作家は、一定の役割を果たしたものと推測される。しかしこの点についてはさらなる調査と考察が要求される。1840 年代の「知の構造」については、次の機会に取りあげたいと思う。

## Дворянский писатель А.К. Толстой и русская литература 1840-х годов

КАНАДЗАВА Томоо

В русском литературном сословии 1840-х годов появилось множество произведений многочисленных писателей-разночинцев. В этой связи, работы дворянских писателей, которые и сыграли главную роль в эпохе романтизма, были менее заметными. В действительности же, в 1840-е годы они продолжали активно писать произведения.

В целях более глубокого понимания сложных переплетений литературных направлений сороковых годов, нам необходимо исследовать литературное творчество дворянских писателей того времени. Целью исследования в данной статье мы возьмём произведение А.К. Толстого «Артемий Семенович Бервенковский» (1845).

Алексей Константинович Толстой (1817-1875) происходил от дворянского рода и воспитывался своим дядей, А.А. Перовским, высокообразованным человеком, известным в литературных кругах романтическим писателем под псевдонимом Антоний Погорельский.

---

<sup>23</sup> А.И. Гелтцен (森宏一訳)『ゲルツェン著作選集 1』同時代社, 1985 年。

Дядя оказал сильное влияние на молодого Алексея: он владел несколькими иностранными языками (в том числе итальянским), имел вкусы к искусству и науке. Это влияние отразилось и на Толстовские работы, особенно его ранние произведения.

Касательно повести А.К. Толстого «Артемий Семенович Бервенковский», А.Д. Жуков отметил, что повесть представляет собой явное подражание Гоголю и всего лишь пробу пера в духе «натуральной школы». В то же время Белинский, давший суровый отзыв о повести и, всё же, оценивший гоголевский стиль, совсем не придал значения самому «Артемию». Интересным здесь также является и существующее сильное расхождение мнений о повести между Жуковым и Белинским. Мы предполагаем, что данное расхождение было вызвано тем, что Жуков сознательно избегал содержательный анализ этого раннего произведения Толстого. Мы также должны подробно рассмотреть и несколько сдержанные взгляды на самого «Артемия».

По мнению Жукова, в повести подробно изображена жизнь одного помещика, что напоминает стиль «натуральной школы». В действительности же, Толстой не предполагал изображение лишь обыденной русской помещичьей жизни.

В повести изображается герой Артемия Семеновича Бервенковского, который, с одной стороны занимается механикой, а с другой стороны пользуется обширными знаниями естественной науки и искусства.

Мы можем отметить, что целью автора являлась попытка нащупать связи между понятиями «наука» и «искусство»: помещик-механик «Артемий», и гость-живописец «Я» воплощают эти два понятия. Таким образом, рассказ «Артемий» содержит мысленно-философскую структуру. Нам представляется, что стиль повести неделимо связан с отчасти дилетанскими и мечтательными взглядами молодого Толстого, которые развились в дворянской среде под влиянием дяди.

Повесть «Артемий Семенович Бервенковский» была попыткой А.К. Толстого намекнуть на то, что не только он, но и другие дворянские писатели того времени вкладывали «игру молодого воображения» и неустоявшиеся взгляды в свои произведения. Мы также вспомним работу В.Ф. Одоевского. В его романе «Русские ночи», в беседах действующих лиц, описаны различные сферы знаний: знания о философии, об изобразительном искусстве, о музыке, о науке и других сферах. Игра обширными знаниями в различных науках, описанных в тексте, используется автором больше для самолюбования.

В заключении, мы укажем, что данные две работы Толстого и Одоевского были написаны под влиянием дворянского воспитания и дилетантско-мечтательных взглядов самих молодых авторов. В тоже время анализ произведений дворянских писателей того

金 沢 友 緒

времени несомненно помогает нам исследовать направления литературных движений 1840-х годов в России.